

# 古河志

六

和書門	三六四	函	一八	冊	六
類	五	號	一	架	一

和書	三六四	函	一八	冊	六
類	五	號	一	架	一

地  
四  
四

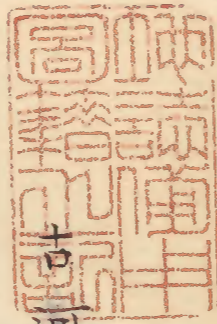
内閣文庫	
番號	和 36451
冊數	6 ( 6 )
函號	174 136

共六



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり





古河志卷之第三

國郡莊等ノロケ

武藏國埼玉郡太田莊

二下總國ノ武藏國 和名抄年佐之延喜式訓亦同

所ニ委ス古國 諸國名義考略曰武藏名義イマ、考以ル 縣居

府在多磨郡 大人身狹上子對ひも身狹下も、いそれつれ



諸國名義考略曰武藏名義イマ、考以ル 縣居  
清々鳴りれも濁々、サ邪字まゝ、藏字まゝ  
方彙集十甲ノ年射志野ノ射字イ付れも濁々

考子用ノ例あり 名義イマ、考以ル、イマ、考以ル

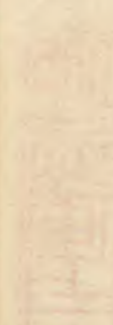
入信友云國造本紀ノ元邪志國造の字ノ胸刺玉造



と何れも多し地名とすえり胸刺身刺るもの  
ち事より水地名ありんくといひ 續日本紀称



徳天皇神護景雲二年六月癸巳武藏國獻白雉  
云々奏云雉者斯良臣一心忠貞之應白色乃聖  
朝重光照臨之符國號武藏既呈戰武崇文之祥  
云々と何れもいふ年邪志の三字は好字より改り二字  
より先武を花とまき志字は若くはれいり後よ  
國より白雉はよりいふは武の二字は祝  
い奏しるは河より必しも國名の起りし莫  
るは誤りそきと式より武をいふは記しり



武藏國秩父嵩者其勢如勇者怒立日本  
武尊美此山奉為祈禱以兵具納埋岩藏故曰武  
藏といふは武蔵の字より和泊の勅  
命細もあはぬ後人の字よりあつたはるは作  
りかよふれりしに五篇あり 續日本紀光仁天  
皇宝亀二年冬十月己卯太政官奏武藏國雖属  
山道兼承海道公使繁多祇供難堪其東山驛路  
從上野國新田驛達下野國足利驛此便道也而  
枉從上野國色樂郡經五箇驛到武藏國事畢去  
日又取同道向下野國今東海道者從相摸國夷



參驛達下總國其四驛往還便近而去此就彼損  
害極多臣等商量改東山道屬東海道公私得所  
人馬有息奏可

埼玉郡 和名鈔佐伊太未延喜式ノ訓同シ

萬葉集第十四卷武藏國歌九首之内  
佐吉多方能津尔乎流布祢乃可是乎伊多美都  
奈波多由登毛許登奈多延曾祢

わねえきんよとよいん

太田莊

和名鈔埼玉郡ノ下郷名ノ内ニ太田於保トアリ

向古河村

正觀山

真言宗新義 古河徳星寺未 真光寺

舊真光院

寺中古河寺中古河寺中古河

或外埼玉郡真光院寺中記

真光院創平古河平古河平古河中古河中古河中古河

以字多明神古河和上古河大將軍古河是利君古河

商略中 幸古河幸古河幸古河幸古河幸古河幸古河幸古河幸古河

天雨雪雨古河雪古河雪古河雪古河雪古河雪古河雪古河雪古河



署上河ノ字オチ  
タルカナクテモヨキカ

了士淺百願、殃災迺止矣。自尔以来、  
又寺之賢、昭一道業、不讓于師。庚子、君夫人疾、而病  
活、竹也、竹里 致了、歎請、故於照、若、若、師、於、修、法、三、百  
四、儀、皆、究、病、寺、愈、君、之、感、焉、更、給、給、壤、田、三、千  
以、契、所、寺、一書以教未及于終曰之  
永給所寺廟 焉、  
一、也、一、 所、以、淺、乃、社、之、所、總、也、昔、佛、那、何、賢、院、村  
之、所、一、 又、一、所、云、向、古、河、村、密、寺、素、光、院、市、等、  
割、迦、石、所、籍、在、東、而、深、缺、焉、河、之、向、口、結、之、伊、契、袋  
村、下、畧、竟、保、愛、矣、秋、水、日、也、

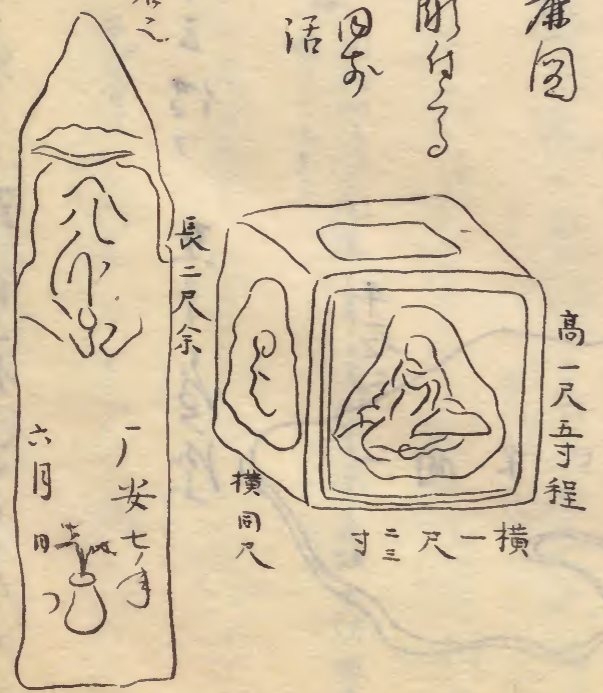
一、以、寺、以、本、寺、若、敏、原、表、乃、是、利、乃、方、之、在、古、向、一、西

あり、一、然、た、ら、ま、う、つ、一、と、云、土、人、口、碑

一、觀、音、半、在、右、之、石、之、極、也、以、古、後、乃、深、以、之、流、れ  
下、也、一、 然、ら、り、阿、若、一、 耶、一、 之、を、一、と、云、一、 何、来  
とも、一、 其、一、 之、一、 也、一、 今、の、法、界、寺、一、 現、在、り、活

銘、音、を、一、 右、一、 之、一、 法、華、圖  
右、一、 古、河、乃、乃、寺、所、剛、白、也、

一、庫、裏、一、 乃、乃、大、本、概、の、一、 也、  
俗、一、 一、一、 或、ハ、ボ、ト、ケ、ト、云、  
若、ノ、墓、印、ノ、石、塔、皆、世、前、也、

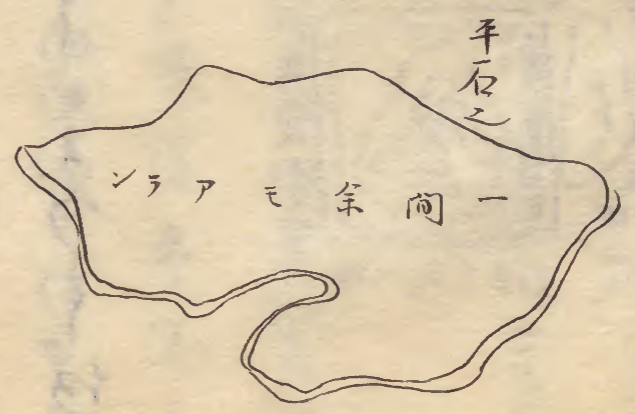


長二尺余  
高一尺五寸程  
横一尺一寸  
横同尺  
一、安、七、寸  
六、月、



古河の境とてこれに治を置き理に初めの志し  
云々

一 不動石 古河に不動石附ト云傳フ 在干屋原



又書附

一 法寄附

一 覺

一 富士法問 善多先

一 以子郎 全法

一 聖親画像 新基作  
以七四八人守

一 以教 一棟

一 石灌盥 一基

以上

慶長七年二月日

固按廿年八國原ノ年ニテ小笠原秀政古河城主  
時ト云ケリ

一 天神社 在法寄附川原

一 天神縁起 善多先寺

此の地國境玉郡向古河天神子刻建幾年と云

亦以版と云ハズ  
多々川カセラレ  
タルト云ケリ



よふふ〜に土人を殺し侍て曰古河に城築く始  
其城筑く向う切方徒よ費し築く〜成りた〜  
當時城を築く王仲を〜  
城の築守〜  
〜  
寺并り社あり延立ん中  
境よあり中村の近右左橋の邊城の築あり  
寺も〜

一 王仲中比類後〜先古河古き山井ち城築中  
寺回ちなる新山屋中再興あり 王仲お地土面

銀き〜王よハを改天と〜

一 武蔵省御郡向古河〜

武蔵省御郡向古河村王仲系云々 中 元禄才九丙子

武蔵省御郡向古河村王仲系云々 氏何至守取者

武蔵省御郡向古河村王仲系云々 中 視了社社檀壞廢清

武蔵省御郡向古河村王仲系云々 中 視了社社檀壞廢清

武蔵省御郡向古河村王仲系云々 中 視了社社檀壞廢清

一 武蔵省御郡向古河村王仲系云々 中 視了社社檀壞廢清

武蔵省御郡向古河村王仲系云々 中 視了社社檀壞廢清

武蔵省御郡向古河村王仲系云々 中 視了社社檀壞廢清

武蔵省御郡向古河村王仲系云々 中 視了社社檀壞廢清



於向古河村五社社の祈禱 松田ハチマツ 尉安休  
引く物初河連歌

花の香もいほや ちほ神の色 吉呢

こころもちるふ ちまのつと 安休

葉もあけ 鶴の流をちまふく 月水

うねやもも ねむりうり ちあまを 白負

はらけとをんこく ち神のまの目 西英

古きあうはきやみか ちまう 成慶

めさめつ ちけちやぬる けのめし 好光

ゆきよ ち水うり ちまのまら木 吉經

又二神 葉ハ吹雪 ち紙ノ ちまうて 阿  
その安山年 六月 ちまふ ち山 細君 ちま 連歌 仙宮  
三十一

大久保とちつと ちまの涼しきよ ち神

ちちく ちあまのちま代の ちまのハ

目よ ちまふ ち神の 流のく 勝山

ちちく ちまふ ち水うり ちまう ち新

ちちく ちまふ ち秋の ち ち心  
ちちく ちまふ ち秋の ち 出

下略ス



*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

源三郎

源三郎

源三郎新政字治少くはわしと自らとて  
 此の世に遊れぬしはは果してなまはなりとて  
 まゝは信りとも之位そは紙紙とて持まり  
 埋りし後福早をりともそは差はらぬれし  
 ちうじてあはせはよはははははははははは  
 千石より年久しくははははははははははは  
 新ひりしあまつさへ血亂れいさくははははは  
 や皆人の志るあはははははははははははは  
 とく久あ持傳へしははははははははははは











寛永八年四月朔  
右大臣 通

同部同在柏戸村

お撲力士 柏戸村を去る

許多志曰柏戸村を去るハ初ノ出井清以市ト云我孫  
國境玉郡柏戸村ノ民也井新内ナル者弟也幼ハ  
大漢多力以テ角触ヲナス 弱冠ニテ 郷里ヨリ乃チ去ル  
シ寛慶中伊勢海立交偶道テ之ヲ見其ノ自カラ  
尋常ノ器ニ非ナルヲ偉トシ 請フテ弟子トナシ 教ルニ  
其法ヲ以スル時ハ愈々益勵ケテ技大ニ進ミ 其徒ノ一二ニ

居ん是ニ於テ伊勢海立ノ柏戸村を去るト改メ稱セシム  
天保元年伊勢海没ス因テ是嗣テ伊勢海村を去るト  
改メ寛政八年乙酉所ノ歳中九ニ没スリ 其伊勢  
海ヲ移スルニ當テ弟子ト云テノ柏戸村を去るト名ノラシム  
村を去るニ先ツテ没ス又弟子ト云テノ柏戸村を去るト  
喚ビムカク存スル是也



下野國都賀郡小山庄上高崎村

此跡松一本

此跡松一本アリト人ノイハド未タソコ迄ハ行キ見子ハ尋テ後ニ書スベシ

下野國都賀郡小山庄上高崎村

百燈 友右衛門

苗字青木

此跡松一本  
アリト人ノイハド  
未タソコ迄ハ行  
キ見子ハ尋テ  
後ニ書スベシ

村中傳へ云フ高崎御前の家元ニト右ニ高崎御前誕生ノ旧跡ハ

ヤノ住居ヨリハ西北ノ方ニ當リ字ムツヤト云耕地乃チ其西之ケハ

血脉絶ユレ氏長崎侯増山君也ヨリ三人口ヲ賜ハリ毎々年賀ニハ兩

カヲ奉シ上下着青木友右衛門号シ出ルトナリ友衛門

式書曰 叡者院涉西の以母人ハおらくの馬と申以父青

木三太郎利長といふ下野國都賀郡高崎村の人ニ因リ國

崎田村の増山城跡ヲむさめ紫といひ一とめとりてむさめ



此人との二人とくりあひむきめハつるといふ妹ハさふ  
ちちおらく殿之男子ハ兄と名ニゆ才と名ニ賜とていひける  
寛永四年は父利長三十三歳少てくせくれも母むきき  
子ハちちとともあひてあひ七歳作たすの清宗といふあま  
嫁ハ江戸の浅草ニ住まふれり寛永十年おらくの口方  
はとく十三少く大猷院の口方よきなり仕へて同き十三  
の八月三日よこる君とまふくたまあはらる儲副よて海にせ  
まひしうしおらくの局もあはき人よかいつくれまひは母業  
もさうあき人よたうりまふ山殿といふ口方ハ言家ありし  
平川或部右衛門言家の室とあり口方二人も口方人よあられ

て兄ハ増山浮正が跡正利と名なり之が西尾の海よここる  
の地よへて場り二万石中以終父作たすも公より月俸二百石  
残あてとこるこれにふ安甲は太猷院の口方かくれさせまひ  
しうハおらくの口方宝樹院殿と名ニあはらるまふりく水産  
元年のついでしうおらくこれに上神不伊勢保のいて由は  
ゆあしこまふんとて口方跡正が跡正は依まつふまつて  
るまふにはあやみ日ありまおらるまひて十二月の二日  
よこせまふ口方三十二とせうけくまふ口方なきくハ東  
叡山毘沙門堂のうしこまふおさめあはらせてこあらくを  
たてられぬ又のこまふくは口方法をこまふれし時



正二位とわたり系せらる又曰此父七海々忠妻のそくく  
よ三と船といひり男より四若のち源もとて日蓮流の  
ちる日暮といひり才子よりくお家一月僧といふ寛文  
五年天台宗より依せせく東嶽山より一字と建られ淳  
島院と名つけ月僧と地よりちりる宝樹院友の口善提  
のそりともゆえ一城より院およめて予重代と改りしと

下  
異

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

下總

鴻巣村

御所

宝藏院

徳源院

龍樹院

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

土地下也

蕎麥サツマ芋此二

呂ハヨロシ近末追

桃林鮭魚茂ノ

稼穡ノ助トナレリト云

一鴻巢御所跡

今土人字シテ地之地ト云

此字臆説新御ト云

下總國葛飾郡下河邊莊鴻巢村

本寺近江國蓮花寺今在中山道昔ハ

保谷山ヲ源院

十念寺

時宗

記曰

村長所藏開基ハ當住ヨリ十八代以前重

阿ヨリ十一代目殊阿代慶長十七壬子年回

禄縁起焼失

寺内

畑或又武畝歩

弥陀免

已上

門東向平地南西北自然山他ヨリ見レバ

下村長ノ記ニヨリテ見  
レハ十念寺開創ノ所ハ  
爰ニ非ス御所廢絶ノ  
跡ハ遷リタルナラン不  
然ハ年譜齟齬ス



土手ノ如シ南ハカヲ掘ニテ其外ハ田  
 畑也西者沼也裏行一町余今ハ本堂庫裏  
 ノ余ハ都ヘテ草木小笹等生繁リ南方ヘ  
 天神松西ノ方ヘイナ松ナト云フ立テル  
 ハ足利家ニテ賞翫セラレシ松ノヨシ享  
 保ノ頃本多中書領地ノ節迄ハ已前ノ花  
 木数株有テ春閑花之時ハ觀花群聚セシ  
 ト傳承シタル由寺僧物語リス

御所来由許我志 覓泉光隆記并鴻巣政村長  
 之記ノ比技シテ各載ス

氏女号古河 姫君 氏息女 後国朝室 逝去ノ後  
 頼氏ニ配ス 委シテ古河公方ノ系譜ノ所ニ載セタリ

秀按ニ天正十年ハ信長  
 変死ノ年ナリ是歳秀吉  
 古河ノ事裁断アルハカ  
 ラズ誤リアルベシ

天正十年壬午年十二月父美氏公逝去無嗣  
 子只氏女一町千時九歳依之關白秀吉公ヨ  
 リ取来十二万石被取上

按スルニ鴻巣一ツ村而已ニテ  
 モ三百石ニ余ラ如此數村ヲ  
 合シハ名家後故繩ヲモ  
 ナクテ三百石ノ名目ヲラレタル  
 一ト見エタリ

鴻巣村へ移シテ僅三百石ヲ与ヘ玉フ此村  
 數都合セケ村

鴻巣村 原村今原町 長谷村 牧野地村  
 新久田村 伊賀袋村 向古河村

天正十八年太閤ノ言ヲ受テ國朝ヲ以テ聲  
 トス千時十元 和六申五月六日逝去歳四十七 号  
 源徳院殿慈峰一晃公大禪定尼同所香雲院



小宮山氏云武徳編年  
集成云天正十八年古河  
御所右兵衛督美氏去

天正十年極月廿日卒去  
シ嗣子ナク杜稷爰断絶  
ス秀吉是ノ嗣王ト聞東御  
所基氏御ノ胤滅ル事ヲ歎  
シ少子御所九兵衛督義  
明嫡男右兵衛督頼純ノ  
息國朝ヲ以テ遺跡ヲ継  
ス美氏ノ孤女ヲ以テ是ニ嫁シ  
野別喜連川五千石ヲ賜リ  
左兵衛督ニ任シ

神君ノ賓客ニ准セラル  
○許我志恩曰國朝後ニ  
頼氏美氏ノ女ニ配シ  
美氏ノ嗣トナレ喜連  
川ニ住シ半ノ鴻巣ヘモ  
在リシト云

今徳源ニ葬ル寡居九年ナリシト云フ  
院ト云喜連川判鑑ノ以テ畧出入

左兵衛督國朝

此ヨリ已前出テ古河公方系  
号喜連川童名ニ若丸

天文七年祖父右兵衛督美明戰死ノ時息頼  
純初生シテ房別ヘ落居里見美弘年来輔  
佐之天正十八年秀吉之命ニ依テ嫡家ヲ継  
喜連川ニ住ス  
癸巳文禄ニ秀吉高麗征討ノ時上洛鎮西ニ  
赴ク藝別ニテ病ヲ二月朔日逝去号法常院  
殿球山良公ニテ

九馬頭頼氏

童名龍若丸 國朝弟也

國朝逝去ニ依テ氏女ヲ以テ妻頼氏其家ヲ  
継シハ是秀吉ノ命也  
丙申慶長元河内守美親誕生母ハ氏女也  
戊午四美親息竜千代丸誕生母ハ神原忠政女

己未五三月廿九日美親御臺逝去号松月院  
殿  
庚申六五月六日氏女於鴻巣逝去  
丁卯寛永四月七日美親逝去号天壽院殿  
曦山英公三頼氏於喜連川逝去号大樹院殿  
庚午六十三涼山蔭公

山幼公云喜連川喜親  
所臨濟派龍光院也  
全ク氏女ノ為メ立ラレシ  
鴻巣殿故美親  
ニ此人逝去後ハ自  
然御所廢セラレタル  
ト云シ松後素アリ

義親

河内守童名梅千代王丸寛永四月七日逝去

女子 廿九歳 母古河姫君美親同腹正保元六月廿七日  
逝去智勝院殿 寧應融峯岡公

右兵衛督尊信 嫡孫承祖 母家女号欣浄院

尊信已下系依喜連川可見不与鴻巣之譜也  
或記 村長云寛永七年ヨリ三ヶ年御領所ニ  
相成リ同十酉当家領古河時ヨリ引続キ今ニ



古河城附ニナリシ也

此記ノ以テ案スルニ天壽院殿卯年没改盟  
辰ヨリ己迄二年ノ間領主不分明ナリ依テ  
又考フルニ頼氏大樹院殿遠逝午年六月十  
アレ頼氏一生成ハ鴻巣領召放サレガ  
ニテ頼氏没スルニ及テ没収セラレタル  
ニモアラシク猶考フヘシ

一地之地之事

コ、ハ氏女ノ住ミ玉フ程ノ居所バカリニ城

ト云名ノ残りタルハイカニモ不審キ一之因

テ考フルニ横町徳星寺後山ニ根岸氏ノ墓一

基アリ面ニ古鴻巣城主ノ文字アリ是ハ武列

ノ鴻巣ニモアラシクト旧来ノ墳墓ノ地ト

此全文徳星寺條アリ

モ見エ子バ爰ヨリ中里程モ隔リタル所ヨリ  
送葬センモ謂ナキヤウニ若此鴻巣ナラシハ  
僅半里ニハ足ラス殊更城主ノ銘ト地ノ地ト  
云ト似ツカハシケレハ此墓面ノ鴻巣ハ爰ト  
定メタキモノニ其墳ノ施主秋元藩根岸某トア  
レハ今ノ山形侯藩士根岸家ヘ源兵人シテ  
尋子問ヒシニ其根岸トハ家モタカヘハ何トモ  
申ヘキ由ナシト傳ヘシハ口惜シキワサニ

鴻巣村

當山派修驗



一 和州内山采久寺末 宝藏院

畑八畝分程 本尊 不動免

田壹及步程 愛宕免

右開基ハ生実或作弓 国朝鴻臚御所へ入来ノ時

陪後ノ侍士ノ内ナリシカ後ニ不具ニナリ勤

仕難成御所ヨリ命有之修驗道二入リ宝藏院

ト号シ專テ御所ノ祈願ヲ修シタリシ也今以

喜連川家へ勤ノ一有之ト云 村長話

鴻臚村

興国山

相州鎌倉岡覺寺末臨濟派

德源院

寺内畑三及六畝步程山林免

許我志畧曰美氏ノ開基也此寺始ハ香雲院ト

云 美氏 元和六年改メテ德源院ト称セリ 所謂氏

已上

村長記曰開基夢想国師也ト云々 二說開基

境内南西ノ方ニアリ墓如此

鹿圖 追テ可引直

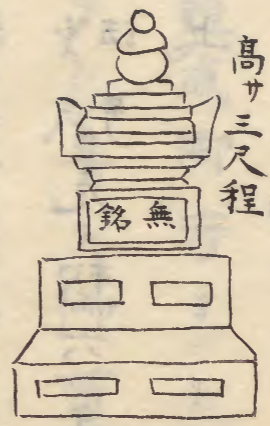


高サ七尺余 正面ニ松生タリ



河内守美親墓

東向



徳源院殿墓



如此燈籠 唯一基西墓

ノ向ニ在リ



メグリノ竹木ノ林ニ

鴻巣村

和光山廣福寺

龍樹院

古河横町徳星寺 未新美真言宗

開基文安年中也 天正年中近古河城内辰崎ニ

在之由申傳ヘタリ 公方家鴻巣ヘ移ラセ玉フ

時当寺モ此所ヘ引キタリ 四代以前宥覺時代

炎上諸記録焼失ス

已上故村長所持ノ記録 正徳年付アリ 空カ下同

一畑壹及五畝步程 虚穴藏免

一田壹及貳畝步程 八幡宮免



此虛元藏每月十二日夜參詣群集ス別テ正五  
九三月八甚シ

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

下野国都賀郡之内

富田郷富田領西御莊

一鎮守住吉大明神社記不詳

富吉村  
神事社能真行 毎年三月十九日九月十九日

神主

邑長兼帯

石塚氏代

坂東神夏ノ能ハ三ヶ所ノミアリト一ハ相刈

大山一ハ武州八幡山一ハ此神前ナリトフル

クヨリ云々傳ヘタルトナリト或人ノ云ヒシ



祖先ヨリ村長ニテ神職ヲカ子タリ神主継目毎  
ニ京都吉田家ハ達シ神事ハ狩衣瓜折烏帽子ニ  
テ勤ム家話  
許志志畧曰昔此家ノ貲産富ヲ致メ享保ノ頃ノ  
主富ニ任セテ奢ヲ極メ甲冑槍劍鞍轡ノ類ヨリ  
ノ諸玩物ニ至ル迄名器ヲ尽クメ是レヲ藏メリ  
其他門牆楹宇ノ高キ鞠場茶室ノ美ナル公卿貴  
遊トイヘトモ及ヘカラサル者アリト云ヘリ又  
頗ル文雅ノ道ヲモ好ミシニヤ都下ノ名士モ是  
ト交リテ結ヘリ畧中又花一ノ母氏久良女ナル者

能国瓜ニ通セリ其集ア室ノ八嶋ト題シ五卷ア  
リ畧ノ名家荷田宿祢在満ト朝散大夫藤原友淳  
是ニ序シ服子遷跋セリ卷毎ニ櫻三香川亀玉ガ  
画ニ三葉ヲ入レリ宝曆中ノ板也本多侯古河ヲ  
領セラレシ畧彼力金幾多ヲ借リ玉ヘリ移封セ  
ラル、ニ及ンテ彼レ返賜セラレントテ求ムル  
氏全ク償フテ能ハズ因テ贈ラル、ニ其家ニ傳  
ナル所ノ猿樂ノ舞衣舞具ノ善美ヲ尽セル數十  
品ヲ以テス後ニ彼レ家通轅軻ノ多ク財宝ヲ蓄  
キシ畧ニ舞衣ニ領ヲ二百金ニウレリ又古作ノ



鬼面ヲ阿部侯五十金ニ求ムレド價ハ卑キヲ以  
テ與ヘズ是レ皆本多侯ノ贈ナリト云今ニ  
大君日光ノ陵ヘマ井リ玉ヒシ時ハ彼レ例ニ大  
官格ニテ鎗ヲモタセ必ス不ク黄金雕飾ノ二劔  
ヲ佩ヒテ出ル畧中此所ニ六部堂建シハ故アル  
之今ハナクハヤク破却シテ畧ス  
南郭文集四編與稻仲明書續畧曰再航野渡行至  
一小馭曰邊屋吾輩七子如出襄城之野遇亭長問  
途則曰富吉距此十里而近日暮乃僦夫馬亭長者  
富吉主人可識預知吾徒當過奔走速辨而後不為

迷慮徐向富吉至則鄉古森然列柏從橫蒼道町町  
為大邑居蓋闔村皆石塚氏所占住故不似他之野  
里擁擁既而主人舉族整服逢迎攝待甚恭自門但  
堂巨燭照天乃延上堂厦屋連楹供帳施設拜趨進  
退遇以大賓而吾輩踈慢為性乃顧諸子未遑解裝  
欠伸綻露頗似厭繁礼者時頃供饌食飲訖始乃寢  
息明日雨日晏而起追憶前二日天晴氣暖不為行  
阻相言為慶至夜莊樹蕭飒宜聽秋雨命酒賦詩亦  
到更夜翼日兩晴步涉主人園怪石嘉樹鞠場茶室  
率倣都下貴遊家加以素封之居千章之材園後有



主母氏之居過而謁也坐樓上為設茶酒歡語而還  
休止三日或乃散行近莊時方收稼農夫婦子皆出  
在野田家之趣与秋晚之景相適亦足以滌平日器  
塵之胸主人為吾輩迎歡勉欲日新至會人作舞  
曲惟幾都已來未嘗遇山即望西北有近山如一盆  
石紫翠可摘不接他高密盖孤山尔問之則云大平  
山道即往返一日行云吾輩勝癖復幾乃將適遊時  
十月朔日也夙駕而出諸子與主人家輩謹諫俱行  
畧既下直向野路前後連炬相呼而歸都人士可不  
能習畧到館既過三更每復飲而歇間二日以初四

之日將幾歸乃圖舟就一流出至邊屋斯干諸流可  
會漕船多湊富吉主人預命船主一艘一漕船船主巧  
意以囊米壘床積炭苞壁左右以帷衣之覆苔為屋  
中間為居所餘囊苞重疊艦上為觀樓儼然一大樓  
船也皆俱上船主人家相送至古河而別畧下  
張子遷中字唐詩聯句ナトアリ裝標以今三家  
藏シテアリ又墨画之馬アリ其記云  
凡書畫有不論巧拙以其人取之者則或名德或勲  
貴唯其所獲乃尊奉以藏之而名家不與也此圖也  
是為南郭先生所為也其以為巧乎余豈敢知之其



以為拙乎余豈敢知之唯是高遠慘澹氣象自別不  
知与杜少陵所謂寒空煙雪者何如其品盖有雖  
名家猶不可及者云先生以天下文宗名德於一代  
也固當不論巧拙尊奉以藏之矣况其品又有虫名  
家不可及者也乎其又豈可與尋常所獲而藏之者  
同之也餘承裕謹識  
南郭文集四編  
同諸子遊下毛列富吉石冢氏家行樂數日賦贈  
主人國卿三首  
元五  
近縣浮遊興偶來留此鄉主人多雅性吾輩任清狂

萬頃臨波潤千章列樹長  
所求幽意足都會香相忘  
仲長論樂志平子賦歸田  
園菓香棋熟河魚玉膾鮮  
飲來三日醉談罷五更眠  
家釀千余石坐疑封酒泉  
豐稔田家樂淳凡別有情  
隣莊獲秋後巷曲夜春色  
日出犬雞散天閑草木清  
只慚武陵客行使野翁驚  
秋夜宿石冢氏館聽雨得四支  
村樹秋色雨遶枝  
終宵置酒欲酣時  
相看不是離家  
遠猶似蕭蕭添客思

石冢主母氏詠歌跋  
余遊富吉石冢氏  
家見主母氏觀其所  
詠因凡五贊全志成  
幸盈簡金乃不覺  
歎容乾致曰

予嘗聞之累代余リシ積ンテ然此ニ非ス元  
禄ノ頃未夕貧民夕リシ或日黄昏ニ及テ日本  
誓古先生述文因凡惟感朝廷閣卷以矢其言無非九功之歌宮媛相與為詠亦被二南之化是以傳誦



形管之詩有開婦言之說而中世改殊其俗亦變矣作者猶爾不乏女流後為英聞所謂先王之教者茲睹主母之什焉  
若有人夙庶子  
求野歎且夫好  
古者必尚其世  
尚世者必行其  
則然則石家  
此母推之內  
則亦猶文伯  
之家教以古  
訓也家範攸  
立母德可敬  
謂余有言  
愧通未習  
敢題所聞  
姑應其索  
尔

廻国ノ六十六部来テ一夜ノ宿ヲ借レリ明日去  
ル可キガ病ニ依テ數日逗留シ遂ニ此ニ瞑目  
セリ因テ其笈ノ内ヲ改メミルニ金五十兩アリ  
固ヨリ何レノ所ノ人ト知ルニヨリシナケレハ即  
チ厚ク葬シ余金シ尽ク己カ物トシ是ヲ種トメ  
次第ニ貸殖シナスト云後彼カ追福ヲ為ニ六部  
堂ヲ建テ廻国ノ修行者ヲ宿セシメ今ニ尚シ存  
セシ是也又文近頃ツノ邑ノ人ニ聞シテ一奇話  
ニメ前説ト同ラス曰渠レ世ニ郷士ニ富シ為  
ス一久シ元禄ノ頃初メ然ルニ非ズヤ其六部

堂ヲ建レハ大ニ故アル也元正ノ父ト又祖父ト云富之  
亟アル也且那寺ノ感應寺ノ主僧トテ公事ト起ル  
テ私ニ決スル一ツ得ヌ江戸ニ訟ニ及ヒシカバ各  
ヘ召筒来シニ主僧ノ前ニテ富之亟偽テ怒レル  
マ子メツノ召筒ヲ裂テコレヲ火ニセリ是レハ  
預カシメ廣召筒ヲ作り置ツレシ焼シ也主僧カ  
クトモシラズ驚キ又訟フルニ渠レガ上ツ憚ラ  
サル無頼ノ状ヲ以テセリ即チ覆治セラルハニ  
富之亟真ノ召筒ヲ出メ然ラサルヲ自セリ此  
ニ於テ元来ノ一ノ是非ヲサシ置テ主僧ヲ先ツ



偽ヲ訟シ未歸ノ追放ノ罪ニ行ハル僧シノ姦計ニ  
墜テ寃ヲ被ムルルヲ深ク憤レリト云後幾ク無フ  
メ富之丞癩ヲ病メリ自テ悔悟スルニ此レ不善  
ヲ行ヒシ報ト也ト因テ六十六部ト成テ廻国ノ  
修行ヲナシ適佐渡ニ渡リ梵字水ヲ心寺ニ至リ  
シカハ寺主ハ即感應寺ヲ放タレシ彼僧ナレハ  
富之丞太ニ面自ヲ失ヒ愧恥空ノ入ヘキナク即  
チ梵字水ニ投メ死セリ其後此水穢レタルカ為  
ニ梵字浮ムトナシト云是ヨリ後廻国者ノ佐渡  
ヲ過テ此ノヲスキク者關東ニ至レハ必ス富吉ヲ

訪テ是ヲ吊セリ是ニ於テカ六部堂ヲ建テ来者  
ニハ必ス小金一箇ヲ与フ此皆其追福ノ為ト云  
ヘリ  
固云此兩説ヲ以テ其邊ノ者ヘトヒシニ全盛ノ  
頃人ノツ子ミナドニテ云ヒ出シトモアラシ  
文化ノ今ニ至リテハ其六部堂ハヤク破壊スレ  
ハ少年ノ者ハツノアリシ所サヘシラスト云イ  
キサレド猶古老ノモノニタツ子トブヘシ

一 幸寺不動院末 本山派修驗 別當 藥王山 安養寺



一 卷不詳 小田原本 遠山 山内 除地

一 藥師堂一字 除地 樓門 別當同寺

一 熊野社 除地 村内百姓持子

一 三島社 稻荷社 共三石塚家裔

一 天満宮 天台宗 別當 慈雲山

一 朽木御城内圓通寺客末 天台宗 感應寺

一 山内除地 山内

閑基来歴不分明

此處文字模糊不清，似有「山内」等字樣

下野國都賀郡 榎本郷 東水代村 中御ノ号ス

榎本郷

水戸ヨリ中山道へノ往還ノ馬次也 定メ四人 三匹ト云 馭

路ノ方ニテハ榎本ト云ヒ村ニテハ東水代ト云

フ此町曲尺チ也水戸ノ方ヨリハ東口ヨリ入南

一行ク中央九尺程ノ浅泉流ル至テ清冽也 山近キ故

又汀ニ四季咲ノ杜若アリ紅葉ノ頃ナト別テ麗

奇観ト云フヘシ

村中字

一 上町中町下町外橋横町西城上新町下新町



一古城跡

右宿北側ノ町裏耕地ニ在リ今ニ隍<sup>ナリ</sup>臺<sup>ドク</sup>ノ形残リ

然レ凡城址半ハ東北ノ方真引村<sup>關</sup>宿山林中

入レリ

一城主譜大畧

小山美濃守号搜本氏小山下野守合弟也

永祿元戊午年始ヲ築ク後同国藤岡ノ城ヨ

リ滅セラレタリ已上村長善兵話

同列同郡生駒宿農民權進所持系圖ノ字ヲ

考フルニ美政判官古城山元大居士

永和四年寅二月固按永和四年ハ戊午

搜本吉勝之寅ハ誤ナラン

如此ハアリ是乃チ初築ノ美濃守ノ一カサレ

ト村傳ノ永祿元戊午トハ年歴百年余ノ違

ヒアリ不知孰是

此美州已後世々々歴シニヤ一代限りニハ有

ルマシキヲ何トモ知レヌ

彰信齋云今川カナ本ニ武州搜本城主上杉陸

奥守憲直トアルハ野州搜本ノ一カ下總武州

トモニ其名アリト云々固按スルニ村内口碑



秀按城主記曰北  
條陸奥守氏輝  
八王子榎本西城  
主也トコレヨルト  
キハ近藤ハ氏輝  
ノ城代ナルキカ

上杉ト云一ハ絶テ在ルハ復シハ非也  
近藤出羽守ハ実名モ不知レハ代城主カ是モ  
藤氏城主トシテハ大寺住持ノ位

或云天正中近藤出羽守住之又榎本大隅守居  
城トモ云如此彰信斎昏中ニ見エタリ

本多大隅守忠純慶長十年榎本領二万石後  
為二万八千石

同大隅守正遂寛永九年八月廿六日此固按  
月日統封ノ

日カ下同

絶 同 犬千代 同十五年 後同十七年家

己後永ク廢城トナリタリ

城主系譜 小山家系前ニ出シタル外ニ奉ク  
ハキ一ノナケレハ爰ニハブク

品 某 近藤出羽ノ 某 喜左エ門 重道 出羽左エ門 女子三人

近藤喜左衛門某父ヲ出羽ノ某ト云八王子ニ

住シテ北条氏照ニ仕ヘ天正十八年庚寅六月

八王子籠城ノ時本丸ノ城代トナル秀吉家譜

北条家廢亡ノ後浪人トナリテ終ル喜左衛門

元和年中中山信吉カ汲引ヲ以テ威公ニ奉



仕入三百石ヲ賜フ略中寛文三年癸卯十月十四日致仕シ四年甲辰三月十一日死ス出羽左衛門重道初名十兵衛又喜九衛門父隱居ノ家督ヲ継三百石ヲ賜中元禄三年庚午正月廿二日死ス六十二歳中男子無シ元嗣絶ス水府系墓所載之畧秀按烈祖成績曰天正十八年五月結城晴朝將兵攻下野小山上野榎本二城拔之松榮紀事コ、ニ上野トスルモノハ下野ノ訛サルヘキカ又曰武州八王子城主氏照在小甲原使横地

監物守子城中山家範守中郭近藤出羽守山下管利家景勝攻之城兵堅守進攻山下管破之出羽人戰死年譜創案記秀吉譜松榮紀事本多大隅守忠純慶長十年榎本領一万石元和元年野洲皆川領八千石同大隅守正遂二万八千石同大千代寛永十七年五月十二日死年五歳無嗣家絶江城年録寛永八年十二月十二日本多大隅守在所榎本ヨリ参候処於栗橋家来ウセモノ大助大隅ヲ不畱突申候是ハ大隅日来物アラキ人ニテ少ノ咎ニテモ家来數多成敗申付候ニ付テ却テ主ヲ突申候則供之者大助ヲ成敗ス大隅守



手重キ故其夜同十六日ニ死ス己上本多一

按藩翰譜本多佐渡守正信ノ譜ニ正信男子

三人アリ嫡子上野介正純二男安房守改重

ハ加賀ニ在三男大隅守忠純上云下

美濃国武儀郡關町龍泰寺末曹洞宗横町太平山大中寺

永享年中小山家ヨリノ関基ト云ヒ傳フ先年

諸記録焼失シテ何事モ不詳住持話小山美州

帰依ニテ山田村大中寺官府ニテハ富田ト云

前住ヲ請待メ建立アリシト也村長善又云小

山持氏貞和四年四月卒按四年関基西水代郷寺領三千

町進家系ノ内当今除地三町程住僧又云元

来此地ニハ如意山延命寺真言ト云寺ノ在リ

シテ本多忠純領主ノ頃西水代村ナル此寺ト

延命寺ト入替ヘラル今ノ延命寺ハ地乃チ此

寺ノ遺跡也松本一

持氏号大中存孝禅門国公推進家系ノ内ニ

門前制札信長ヨリ賜ハリシト住僧ノ云ヘト没

禁制後九年バカリヲヘタリオホツカナシ

一軍勢甲乙人等乱妨振落

下世国

大中寺

一軍勢甲乙人等乱妨振落



一放火

一對地下人百姓

右

老

天正十八年四月日

固按北ノ同年号同文言ノ禁制

ヨシ山王山東昌寺

按筑波山鹿嶋

陣ノ

ル

墳墓 近藤家二墓

玲瓏院殿浄鑑大士居 右殿天正十八年六月二十三日

田明院殿照月士居 文禄三年正月十八日

外ニ小山家ノ四五墓アリ目ニ立タルノ美

州ニモヤアラントテ一ツ出ス

按浄鑑ハ父田明ガ乃チ出羽介ニモアラシ

秀按ニ浄鑑即出羽介ナルベシ八王子戦死

天正十八年六月廿三日ト武徳編年集成ニア

リ年月日合ス 春庭院殿善發清香大居士十月日ハ



本多忠純墓

九輪大石塔婆 玉垣ノ内ニアリ 別

正面 善伯大居士 寛永八年辛未十二月十六日

下野国都賀郡東水代榎本郷古城前隅刈太字  
長宮善伯大居士奏還郷曲案寛永八年未十  
二月十三日也靈塔西序猶環重月連年迄今垂  
百歲被侵霜雨淋日炙將傾倒其殆如嬰兒行或  
如臨深淵如履薄冰山野之深嘆矣今也享保十  
乙巳年初夏本多帶刀政淳公本多房刈政繁公  
命家臣石津七藏可久加修復彼臣使石工琢磨  
飽盡忠誠所致人力者当即近邑隅刈君之舊臣

未葉等各齋加力未逐日亟成旧物果然似現新本  
有凡无而後之視今亦猶今之視昔故綴一章紀之  
云尔

驚起那伽定裏石 琢磨呈孝盡精誠  
舊碑改觀從天外 鉄壁銀山凡物盛

干時享保十乙巳四月日

本多帶刀家臣奉行  
石津七藏可久  
藤倉庄石工門重當

前總持兼龍泉大中寺 十三世 德鳳丹誌寫

本寺野刈都賀郡朽本本 光寺 曹洞宗 總德寺

写疑焉

上町除地  
太田山  
未寺七寺別記



寺中記録不詳今按成田龍淵寺記曰古河公方  
命シテ大聖院再建ノ時盛綱ノ詞大朝ハ武州成田龍淵寺第三  
代惟通和尚ノ神足ニシテ道德兼備ノ大禪師也  
我本本国下野ニ一寺ヲ建テ請シテ関山ト奉  
敬セシニ聊ノ一ニ付テ錫ヲ留メテ退院ス我  
後悔頻リ也トイヘ凡詮方ナク過ラルニ近頃  
聞ク下野榎本總徳寺ニ在テ通凡ヲ施ス由今  
般ヲ幸ニ一寺成就ナレバ此大朝和尚ヲ請メ  
関山ト大サシト類ニ申上ケケレハ晴氏公甚  
御悦喜有免許シ玉フ盛綱自ラ總徳寺ニ至

晴氏公モ寺ニ來テ師ノ礼ヲナシテ恭敬ス  
云々

西城除地  
身卷山

野州都賀郡小山宿真法寺天台宗 安養院  
寺説不分明也城址西側ニ在リ白櫻数株アリ  
往古城内ニ在リシ依今ニ此所ヲ去ラスト云  
村長

下新町除地  
總持山

上毛群馬郡白井村双林寺曹洞宗 妙性院  
近藤家菩提所也ト云ス 墳墓有無ハ追テ可尋



下町 除地

同州寒川郡寒川村竜樹寺末 真言宗 聖天院

上町年貢地

同州都賀郡西水代定命寺末 真言宗 威徳院

外橋除地

此所總徳寺末 曹洞宗 永昌院

此三ヶ寺共寺記知 上新町年貢地

先徳山

下總国葛飾郡小金井宿一月寺末 觀雲寺

曹洞善化 宗虚無僧

寺記無之 関基年月不分明 此寺本ハ佐野天不明アリシカ故有テ私

天明ニウツリシナリ故ニ今ハ 普化僧寺海内九十三ヶ寺アリ内下野ニハ

カリ十九ヶ寺アリ其十九ヶ寺ノ一也近国

尺八洞箫ト本則此所ヨリ出ス 普化禪師ノ像ハ鈴ヲ持

ノ音ニカナヒタルト居士ニ至リテ師ノ鈴

已上片山某話

古戦

藤園城ニ佐渡守榎本城ニ大隅守右馬入宗鑑在ト

水戸の城ニ佐竹守室の徳キアリト云テ小

田系氏並の旗下ト云々宗鑑以テ石後立ト云ク











